報告1

ヴェールを纏う女性たちの語り

現代パキスタン都市部におけるパルダ実践を事例として

賀川 恵理香　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程

私が研究対象としている地域はパキスタンです。学部のときに大阪大学の外国語学部でウルドゥー語を専攻していて、そのときに1年パキスタンに留学しました。それでパキスタンをもう少し研究したいと考えて、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科に入学いたしました。現在、博士一貫課程の2年目で、先々月に修士論文を提出し、やっと一区切りついたところです。

1. 本研究の概要

はじめに本研究の概要について説明します。研究課題は「現代パキスタンにおけるパルダ概念――都市高学歴女性の語りを通して」です。研究の背景は以下のとおりです。まず、パルダとは「インド、パキスタン、バングラデシュを中心とした南アジア地域に広く存在する性別規範のことであり、男女の生活空間を分離することによって、または女性が衣類を用いて象徴的な隔離空間を作り出すことによって実践されている」と定義されています[Papanek 1973]。

資料1－1はパルダにおける女性の被服の一つの事例です。左側の2人は全身を黒い衣装で覆っていて、右側の4名はシャルワール・カミーズというパキスタンの民族衣装を着ています。このようにパルダの実践としての被服にも、多様な方法が存在しています。

資料1－2は、とある結婚式会場の写真です。右手が女性の席で、左手が男性の席という形で男女の座る場所が分かれています。これは親族しか集まらないという前提の結婚式の会場です。男性が女性と肩を組んで写っていますが、これは親族男性と親族女性なので、ここではそれほど奇妙なことではないということが言えます。

パルダは、女性の健康、就学、就業などあらゆる面で女性の生活に悪影響を与えるとして、批判の対象となってきました。しかし、現代パキスタン都市部においては、さまざまな空間、場所を横断する女性たちが存在しています。このような女性の行動は、「女性を公的空間から隔離する」という女性隔離の価値観からすれば、規範からの逸脱ともとれます。さらに、彼女たちの多くは状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりしており、その被服の方法は「象徴的な隔離空間を作り出す」という観点からも、これは逸脱と解釈することが可能です。

ここで、都市部の女子学生による状況に応じたヴェール着脱の事例を一つ紹介します。資料1－3をご覧ください。この写真は、都市部の共学の大学の敷地内で撮られたもので、彼女たちはこれから家に帰ろうとしています。真ん中の3名は黒い衣類で全身を覆っています。次に資料1－4をご覧ください。

資料1－1　パルダにおける女性の被服の一事例
筆者撮影

資料1－2　結婚式会場
筆者撮影

資料１－３　大学敷地内の女子学生
筆者撮影

資料１－４　大学建物内の女子学生
筆者撮影

発表者の私も真ん中に写っていますが、他に写っているのは、実は資料１－３の女性と同じで、これは大学の建物内で撮られたものです。資料１－３では黒い衣類で全身を覆っていた３人の女性たちは、みんなそれを脱いだ姿で写っています。頭を覆っている女性もいれば、覆っていない女性もいます。大学は共学なので、もちろん男性と接する機会も大いにあります。しかし、このように大学の中と外で、大きく被服の方法を変える女性たちが存在しています。

それでは、彼女たちはパルダの規範から逸脱した存在なのでしょうか。発表者の調査によれば、伝統的なパルダ規範から逸脱していると取られてもおかしくない女性たちの多くは、パルダ規範を実践していると自己認識しています。すなわち、彼女たちにとっては、自らの装いや振る舞いとパルダの規範に矛盾がないと言えます。では、彼女たちにとってのパルダ規範とは、どのようなもので、彼女たちはどのような観点においてパルダを実践しているのでしょうか。このような問いのもと、本発表においては女性たちの語りに焦点を当てた分析を行います。

本発表においては、2017年と2018年の夏に実施したフィールドワークのデータを用いつつ、ヴェールを纏う女性たち自身による、パルダに関する語りを分析します。そのうえで、提出済みの修士論文の内容と対応させながら、論文全体の流れを示します。修士論文の章立てに関しては、付録の資料に書いておりますので、よろしければご参照ください。

２. 先行研究の検討と本研究の問い

続いて先行研究の検討を行います。本研究では、パルダの先行研究とヴェールの先行研究、両方を参照しました。最初に扱うのはパルダの先行研究です。

南アジアにおけるパルダ研究の端緒は、1960年代、1970年代に求められるとされています［Papanek 1973: 290］。初期の研究では、パルダを性別役割分業の制度として分析した議論が多く見られます［Papanek 1973; Pastner 1974］。その後、社会経済状況の変化に伴って、パルダの実践も変化すると主張する議論が多くなっていきます［Feldman & McCarthy 1983; 池田 1993; Haque 2003］。ここからは、女性たちがどのような社会経済状況に置かれているのかというコンテクストを精査する必要性があることがうかがえます。

同時に、男女の分離（segregation of the sexes）や女性隔離（the system of secluding women）の側面は、依然としてパルダ概念に所与のものとしてみなされていると言えます。しかし、現代パキスタン都市部における女性の装いや振る舞いの方法は、先ほどお話しした状況に応じたヴェールの着脱の事例に見られるように、女性隔離としてのパルダという既存の枠組みでは説明できないと言えます。ここから、女性隔離の制度をパルダ概念に所与のものとする視座を乗り越える必要性があるのではないかと考えました。

次に検討するのはヴェールについての先行研究です。ヴェール研究は、1970年代に始まるヴェール化現象を契機に盛んになったと言われています[1)]。この現象を受けて、女性がヴェールを纏い始めた契機を分析した研究や［後藤 2014; 野中 2015］、ヴェールを纏うことによって自身や自身を取り巻く社会関係に起こる影響を論じた研究［Mahmood 2005］、ま

1）そもそもムスリム女性のヴェール着用は、19世紀末に中東諸国の後進性の象徴として内外の知識人層の非難を浴びたことにより、20世紀初頭から半ばにかけて大幅に減少していた。しかし、1970年代後半以降のイスラーム復興に伴い、都市に暮らす高学歴女性の間でヴェールの着用が急増し始めたという背景がある［後藤 2014］。

たヴェールを纏う意義を分析した研究［Khurshid & Shah 2017; 田中・嶺崎 2017］など、さまざまな研究がなされてきました。ここからは、ヴェールを纏う理由や意義を、地域的な文脈に落とし込んで考察する必要性があることが読み取れます。しかしこのなかでも、本研究で解説しているような状況に応じたヴェールの着脱という具体的な行為に言及した研究は少ないと言えます。よって、パキスタンの文脈において、女性たちがなぜ、どのようにヴェールを纏ったり、脱いだりするのかを明らかにする必要性があると考えました。

以上の検討を受けて、本研究の目的は、現代パキスタンにおける都市高学歴女性たちにとってのパルダ概念の変容とその実践を明らかにすることです。研究の問いは二つ設けました。一つ目は、「①現代パキスタンにおける都市高学歴女性にとって、パルダはどのような規範として存在しているのか」、二つ目は、「②女性たちはなぜ状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりするのか」という問いです。

3. パルダとは何か

ここではパルダの概観として、パルダのイスラーム法学上の意義付けについて説明します。パルダの原義はペルシャ語で「カーテン、幕」を指し、男性と女性の世界、内と外を分ける仕切りを意味すると言われています［麻田・中谷 2012: 628］。パルダの定義は先ほども申し上げましたとおり、一般的には男女の分離や女性隔離の制度であると定義されており、その実践として身体的に居住空間を分離することと、女性が顔や体を隠すことの二つの側面が存在するとされています。

女性の被服というのは、そのなかでも象徴的に隔離空間を作り出すこととして分析されており、ハンナ・パパネクはこれを「持ち運び可能な隔離」であると言っています［Papanek 1973］。このようなパルダは、しばしば女性のモビリティを著しく制限するとして、女性に対する抑圧的な制度としても論じられてきました［White 1977］。

パルダという語の使用ですが、南アジア全体、主にアフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュで広く用いられています［Haque 2003: 48］。パルダはムスリムだけではなく、上位カーストを中心としたヒンドゥー社会においても存在が指摘されています［Papanek 1973; 中谷 1995; Haque 2003; 麻田・中谷 2012］。

ただし、ヒンドゥー教徒の間では、パルダにイスラーム教徒とは異なる意味付けが与えられていると指摘されています［麻田・中谷 2012: 628］。また、ヒンドゥーとムスリムのパルダの実践の違いは、その適用範囲にも表れていると言われています［Papanek 1973］。ヒンドゥー教徒では親族関係の内部でもパルダ制度が適用されるのに対して、イスラーム教徒では主に親族関係の外部において適用されると言われています。さらに、パルダ実践のその様子や意義付けは、地域、宗教、階級、カースト、職業、年齢によってさまざまに異なるとも言われています［Haque 2010: 303］。

続いて、パルダのイスラーム法学上の意義付けについてお話しします。ここでは、パキスタンにおける高名なイスラーム法学者であるサイイド・アブル・アアラー・マウドゥーディー（Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, 1903–79）によるパルダのイスラーム法的解釈を扱います。このマウドゥーディーの著作として『パルダ』という本があって、そのなかでマウドゥーディーは、クルアーンの第24章の30節、31節、第33章の部族同盟章の32節、33節、59節に言及しています。資料１－５にクルアーンの訳を載せていますが、こちらはマウドゥーディーがクルアーンからウルドゥー語に訳したものを、私が日本語に訳して載せています。

マウドゥーディーはその言及のなかで視線を下に向けることに関する解釈を述べ、これらの章句においては、視線を下に向け、体を隠すこと以上の含蓄があると主張しています。マウドゥーディーが抜き出した部分を引用します。

> ……一般的に、この言葉（*ghaẓ-e-baṣar*）の翻訳は、「視線を下に向けろ」とされるが、これは十分な翻訳ではない。この章句で示されているのは、常に下を向いていて、決して頭を上に向けてはいけない、ということではない。むしろ、本来の意味においては、ハディースで「目の姦通（*ānkhoṇ kā zinā*）」として示されているものを避けなさいということなのである。〔つまり、〕見知らぬ女性の美しさ、そして彼女の身に着けている装飾品を見て、〔性的な〕楽しみを得ることは男性にとって姦通の理由となる。そして見知らぬ男性の視線の対象となることは女性にとっ

資料１－５　マウドゥーディーによるクルアーン解釈

第24章　光り章（Sūrrah Al-Nūr）　**30節、31節**

【マウドゥーディー訳】預言者よ！男の信仰者たちに言いなさい。自分の視線を下に向けて、貞操を守っておくようにと。これは彼らにとっての貞操を守るための方法なのである。アッラーは彼らの行いを間違いなく知っている。そして信仰者の女性たちに言いなさい。自分の視線を下に向けて、貞操を守り、おのずと顕わになる美しさ以外に、自分の美しさを顕わにしないようにと。自分の胸元を大きなチャーダル（*auṛhniyoṇ ke bakkal*）で覆うように。そして、夫、父、義父、息子、継子、兄、兄弟の息子、姉妹の息子、自分の女たち、自分の奴隷、女性に何の興味も持たない使用人の男たち、まだ女性のパルダに関する知識を持たない男児以外に自分の飾りを見せぬよう。（彼女たちにこれも言いなさい。）歩くときに自分の足を、隠している飾りが（音のせいで）顕わになるほどに、地面に打ち付けて歩かぬよう［Maudūdī 1940: 231-232］。

第33章　部族同盟章（Sūrrah Al-Ahzāb）　**32節、33節**

【マウドゥーディー訳】預言者の妻たちよ！お前たちは普通の女たちとは全く異なるのだ。もしお前たちが敬虔さを受け入れるならば、声をひそめて話してはならない。心に病をもった男が、お前たちに何らかの期待をしてしまわないように。話をするときは、無駄なく簡潔にするよう。そして自分の家に腰を据えて座っていなさい。以前の無明時代のように、着飾った姿を見せて動き回らぬよう［Maudūdī 1940: 232］。

第33章　部族同盟章　59節

【マウドゥーディー訳】預言者よ！自分の妻たち、そしてイスラーム教徒の女性たちに言いなさい。自分の上にチャーダルの面被をかぶるようにしなさいと。それによって、彼女たちは識別され、邪魔されることはないだろう［Maudūdī 1940: 232］。

以上はマウドゥーディーによるクルアーンのウルドゥー語翻訳を発表者が日本語に翻訳した。

> て姦通の理由となる。……よって、何よりもまずその事態を避けることが意図されているのである［Maudūdī 1940: 232-233］。

ここから、男性が女性を性的な視線で見ること、そして女性がその対象となるような装飾品を身に着けることが禁止されていることがわかります。それにさらに言及して、だからといって、この章句は「異性を見ることが決してあってはならない」ということを意味しているわけではないともマウドゥーディーは述べています。

> 人間が目を開いて生活していたら、すべての事物に視線がいってしまうのは当然のことである。男性が女性を、そして女性が男性を絶対に見ないということは可能ではない。だからこそ、預言者は以下のようにおっしゃったのだ。「偶然目がいってしまうことは許されるが、一度見て美しいと感じた事物をもう一度見たり、じっと見つめるような真似をしたりすることは禁止されている」［Maudūdī 1940: 233］。

すなわち「預言者の意図するところは、異性を見ることを全面的に禁ずることではなく、姦通を防止することである」とマウドゥーディーは述べています［Maudūdī 1940: 235］。

さらに、女性の被服の方法に関する解釈についても述べます。マウドゥーディーは、第33章の59節の部分に関して、クルアーンの解釈者たちが揃って「顔覆いを意味する章句である」と解釈していると指摘しています。

> この章句〔第33章　部族同盟章　32節、33節、59節〕はとくに顔を隠すことに関して述べたものである。*jalābīb*とは*jilbāb*の複数形であり、チャーダルを意味する。*adnā'*は*arkhā'*、すなわち「かける」という意味である。*yuduniyna 'alayhinna min jalābiybihinna*を字義通りに訳すと、「自分の上に自分のチャーダルのうち、一つの部分をかけるようにしなさい」となる。まさにこれは、グーンガト[2]をかけることを意味している。しかし、この章句は、通例グーンガトとして解釈されるような特定の衣装を意味しているのではない。むしろ〔ここでは、〕顔を隠すことが意図されており、それがグーンガトによってなされようと、ナカーブによってなされようと、または他の手段でなされようと〔変わらないのである〕。もし

2）グーンガトは、頭の上から布を垂らして顔を全体的に隠す面覆い。ナカーブ（ニカーブ）は、ヒジャーブ（ヘッド・スカーフ）で余った布を顔の横から鼻から下を覆うようにもってくるかたちで用いられる面覆い。

イスラーム教徒の女性がこのように自らを覆って外出すれば、人々は彼女が高貴な女性であり、恥知らずではないということを知ることができるため、彼女に嫌がらせをする人はいない。これにはこのような利点がある［Maudūdī 1940: 247］。

ただし、井筒俊彦訳のクルアーン解釈においては、この章句は「長衣で頭から足まですっぽり体を包み込んで行く」ことを命じているとされています。さらに後藤絵美先生の研究でも、ジルバーブの形状や纏い方について、「女性と違うジルバーブを頭から被り、顔を覆い、片目を出した」という伝承や「ジルバーブを額の上に巻き付けた」という伝承など、諸説があると述べられています［後藤 2014: 60］。このことから、この章句は女性が体を覆う方法について述べた章句であるという点でイスラーム法学者の意見は一致しているものの、その具体的な方法や用いられる衣類についての解釈は分かれていることがわかります。

以上をまとめると、マウドゥーディーによるパルダ解釈においては、そもそも女性が家の中に留まらなくてはならないといった前提は、とくに言及されていません。つまりマウドゥーディーはパルダを女性隔離という観点からは解釈しておらず、むしろ見知らぬ男性と女性が対峙する可能性が十分にあると想定したうえで、そこでどのように振る舞い、装うべきかについて論じています。

これらをまとめると、以下のようになります。マウドゥーディーの視点において、パルダとは男女の不倫な関係――ここでは既婚者が配偶者以外と性交渉を行うことでなく、婚前交渉や結婚前の男女交際なども含むより広い概念――を抑制するという男女関係のあり方を規定する概念であると言えます。

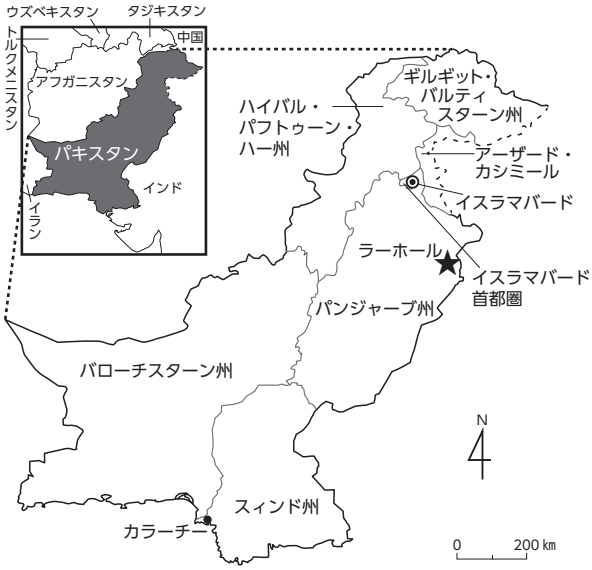
4. 事例紹介

調査地の概要と調査対象および調査方法

最初に調査地概要と調査対象について述べます。調査日程は、先ほど申しましたとおり、2017年の夏、2018年の夏、計３か月半実施しました。調査の対象地は、資料１－６の地図にありますように、パンジャーブ州の州都ラーホールです。ラーホールは人口約1,100万の大都市で、インドとの国境に近い場所に位置しています。ムガール朝期の建築物が残る、とても歴史の古いまちです。

移民の多いカラーチーとは異なって、ラーホールにはパンジャービーと呼ばれる民族集団が多く居住しており、その割合は1998年の国勢調査によると、85.7パーセントにも上るとされています。とはいえ、ラーホールには進学、就職、結婚などの理由で、近隣地域から移住する人々が多数存在しており、とくに大学などの高等教育の現場においては、さまざまな地域出身の学生が見受けられます。

資料１－７はラーホールの中心部にあるバーザールの様子です。かなりごちゃごちゃした様子がうかがえます。バーザールにおいては、店員はほとんど男性です。それに対して、資料１－８のような近代的なショッピングモールも近年増加しています。資料１－９はショッピングモールの内部の写真ですが、先ほどお見せしたバーザールの環境とはうってかわって、清潔で広々としていることがわかります。ショッ



資料１－６　調査対象地ラーホール
筆者作成

資料１－７　ラーホールのバザール
筆者作成

資料１－８　ショッピングモール
筆者撮影

資料１－９　ショッピングモールの内部
筆者撮影

資料１－10　パルダの実践に関する人数・割合

	パルダを実践している	厳格には実践していない	実践していない	無回答	合計
回答人数（割合）	58（83%）	5（7%）	6（9%）	1（1%）	70

出典：筆者作成

ピングモールには、入口にセキュリティ・チェックが設置されていて、さらに至るところにセキュリティ・ガードが配置されていることも多く、バーザールとは大きく環境が異なっています。さらに男性店員しかいないバーザールとは異なり、ショッピングモールには女性の店員も多く働いています。

調査対象者は、ラーホールにある公立大学のパンジャーブ大学とガバメント・カレッジにおいて教育を受ける女子学生です。彼女たちの多くが未婚の二十歳台前後の女性で、社会による性の管理の対象となりやすいということが指摘できます。つまり社会規範を意識した行動が観察されやすいと言えます。

さらに、この二つの大学は、パキスタン国内の公立大学のなかでトップクラスの学力を誇ります。ですから地方出身の学生が多く在籍し、彼女たちの出身地域とラーホールにおけるヴェール着用の実践の違いを比較することもでき、多角的な視点から被服の着用方法を分析することが可能であると考えました。

調査方法は、質問用紙を用いた半構造化インタビューと参与観察です。調査人数は、予備調査で10名、本調査で60名の計70名に行いました。質問用紙は英語で作成し、会話および質問用紙記入言語はウルドゥー語と英語です。調査対象者に関しては、付録資料に調査対象者の一覧を載せていますので、よろしければご覧ください。調査方法としては２人以上のグループ・インタビューの場合と、１人のみの単独インタビューの両方を実施しました。１人当たり約30分から１時間の時間を費やして、長めにインタビューを行いました。

パルダに関する女性たちの語り

資料１−10は、「パルダを実践していますか」という問いに対して、「パルダを実践している」、「厳格には実践していない」、「実践していない」、「無回答」の回答を表にしたものです。

資料１−10からは、全体の８割以上を占める58名の女性たちが「パルダを実践している」と述べていることがわかります。「パルダとは何か」という問いに対する彼女たちの回答では、パルダを「自ら覆うこと」として解釈した語りと、「内面的に美しくあること」として解釈した語りという二つが見受けられました。

①自らを覆うこととして解釈した語りの事例

次に具体的な語りを紹介します。まずはパルダを「自らを覆うこと」として解釈した語りの事例です。

> 「私にとっては、パルダとは私の身体、［すなわち］胸元、臀部、頭を覆うことである。それによって私は快適に感じる」（19番）[3)]

> 「パルダは私にとって、我々の宗教（イスラーム）における義務である。私はパルダのもとに置かれることによって、快適に感じる。クルアーンの部族同盟

3）引用文末の番号は調査対象者を示す。付録資料２、３の調査対象者一覧を参照。

章にパルダの命が下されている。それによると、すべての女性は自らの顔に覆い、〔たとえば〕ドゥパッターを被せなければならない。これがパルダの命である。よって、これはムスリム女性にとっての義務なのである。私はこの命を遂行することに喜びを感じている」(20番)

このドゥパッターというのは、シャルワール・カミーズの３点セットのうちの一つの布です。この布を頭を覆う形で掛けたり、頭と胸を一緒に覆うという方法が取られたりしています。

「パルダとは、それを行うことによって快適に感じることができ、そして邪悪な視線から逃れることができるような事柄である。パルダはイスラームに基づいて着られるべきである。たとえば、アバーヤは体型がわかるほどにタイトであってはならないし、おかしく見えるほどにルーズであってはならない。ヒジャーブは髪の毛を隠しているべきである。〔ナカーブをもしするならば、〕顔が完全に覆われるような形でするべきである」(22番)

アバーヤというのは、首から下を全体的に覆う緩やかな衣装です。通常はヒジャーブと呼ばれるヘッド・スカーフとともに着用されています。資料１－３の真ん中の３名は首から下をこの黒い衣装で覆っていて、上からヒジャーブとして布、ヘッド・スカーフを巻いています。パキスタンでは、このような衣装がアバーヤとヒジャーブと言われています。

「パルダはとても良いものである。それによってすごく保護的(secure)な状態で過ごすことができる。保護的であるとは、まず宗教的な意味合いにおいてあなたの身体のすべてが隠されているということである。〔その状態においては、〕誰もあなたを見ることができない。その観点において、私はすごく良いものとして考えている。〔パルダを実践するには、〕アバーヤを着るとより良い。もしシャルワール・カミーズを着るなら上から大きなチャーダルで身体を覆うべきである。そうすることによって髪の毛が人に見えないようにする〔ことが求められる〕。そして誰かがあなたのほうを見て、魅惑されないような、シンプルな姿で外出するべきである。そのような観点から、自分はパルダを実践している」(34番)

チャーダルというのは、ドゥパッターをもっと厚手にして大判にしたもので、掛けると顔以外はすべて隠れるかたちになります。

「私にとってのパルダとは、自分が他の男性にとっての見世物にならないように自分自身を覆うことである。どのような方法であれ、自分が快適に感じ、誰も私の身体を見ることができないほどに身体が覆われていれば、これは私にとってのパルダである。ナカーブをすることは必須ではない。だから私はナカーブをしていないが、自分の身体をきちんと覆っている」(37番)

「私にとって、パルダとは純粋にイスラーム的な概念である。あなたの美しさは、すべての「婚姻が可能な男性(*na-meḥram*)」から隠されていなければならない。美しさは魅力であり、色彩はあなたを魅力的に見せ、そしてメイクや宝石は〔誰かの〕目を引く。だから、パルダとは、あらゆる面であなたが「婚姻が可能な男性(*na-meḥram*)」にとって、魅力的に見えないようにあなた自身を隠すこと、その方針である」(53番)

②内面的に美しくあることとして解釈した語りの事例

次に、内面的に美しくあることとしてパルダを解釈した語りの事例を四つ紹介します。

「パルダは女性にとっての一つの盾である。それの内部において、女性は守られている(*maḥfūẓ*[4] *rahtī hai*)。パルダ〔の実践〕とともに考え方や心が清らかであることが必要である。〔すなわちそれは、男性を〕魅了しようという目的を持たないということ〔を意味する〕」(６番)

「パルダは女性たちがそれを実践している場合、基本的に女性たちにとっての保護的な盾となる。それは、その人が持っている信仰(*īmān*)の程度によって決まる。羞恥心(*ḥayā*)と信仰(*īmān*)のどちらもが必要である。羞恥心(*ḥayā*)は身体的な外見に表れるものであり、そして信仰(*īmān*)は心の内面における浄性である」(16番)

4) 原義はアラビア語で、ウルドゥー語においては「保存された、保護された」という意を表す。

「私の意見では、視線のパルダを実践すべきである。服装はパルダの基準ではない。私にとっては、人間関係において忠実となり、身体的にも倫理的にも悪いことをしないようにすることがパルダである。私の基準によれば、私はパルダを実践している」(41番)

この視線のパルダというのは、マウドゥーディーの解釈にあった、「視線を下に向けなさい。悪いものを見てはいけない」といったものを意味するということが、ここから考えられます。

「それ(パルダ)は我々の宗教の命令であり、とてもポジティブな側面をもつ。〔それはすなわち、〕安全性(safety)、セキュリティ(security)、満足感(satisfaction)、安らかな生活(easy life)である。視線のパルダ(Purdah of your eyes)を実践すべきである。〔それはすなわち〕悪いものを見ないということ、そして視線を下に向けることである。パルダは私にとって、教育を受けるうえでも働くうえでも支障になっていない。私は完全なパルダの姿で(in full Purdah)公的な会合、ワークショップ、セミナーやランチ、ディナーに出席している」(59番)

パルダに関する女性たちの語りの分析

先に示した事例では、「イスラームの規定を守る」という内容を波線で、「男性を魅了しない」という内容を直線の下線で示しています。事例では、この二つのキーワードが多く出されていました。

さらに、イスラームにおけるパルダの意義付けとしては、男女の不倫な関係の抑制を目的としていたことが挙げられます。ここから女性たちがパルダを、「身体を覆う規範」または「内面的な美しさを保つ規範」であると解釈していること、そしてその規範の目的として「男女の不倫な関係を避けること」を据えていることがわかります。これらのパルダの解釈は、パキスタンにおけるイスラーム法学者の解釈するパルダと一致していると言えます。すなわち、彼女たちにとってのパルダ解釈には、宗教的な側面が強く表れているのではないかと分析いたしました。

ただし、パルダの実践方法、その定義には多様性が存在していることも同時に読み取れます。それに対して、パルダを女性隔離または男女分離の観点から解釈した語りは聞かれませんでした。

すなわちここから、現代パキスタンにおける都市高学歴女性の間で、パルダは自らの装いや振る舞いを規定する規範として存在をしているのではないかと考えられました。これらは必ずしも男女の分離や女性隔離を志向したものではないのではないかと言えます。すなわち、調査対象者の女性たちにとってのパルダ概念とは、男女の不倫な関係を抑制し、男女関係のあり方を規定するイスラーム的な概念として存在していますが、その実践方法には多様性が存在しているということが挙げられます。

被服に関する女性たちの語り

次に、パルダの実践のうちの被服の方法にとくに着目して、その被服がどの程度多様性があるのか、そして状況によってどのように変えているのかを見たいと思います。

調査の結果、彼女たちの被服の方法は、被服の程度という観点から、以下の四つに分類できることが明らかになりました。

資料1－11(1)と(2)の女性は、パキスタンの民族衣装であるシャルワール・カミーズを身に着けています。(1)では頭が覆われていないのに対して、(2)では頭から胸が覆われています。次に、1－11(3)と(4)の女性は、シャルワール・カミーズの上からアバーヤと呼ばれるコートを身に着けています。(3)では顔全体が見えているのに対し、(4)では目だけが見えています。ここでは資料1－11(1)から(4)の順に被服の程度が高くなっているということが言えます。

ここでよく(2)と(3)にはどのような違いがあるのかと聞かれることが多いのですが、(2)の女性はシャルワール・カミーズを着ています。シャルワール・カ

資料1－11　被服の方法と程度
筆者撮影

資料１－12　被服の方法に応じた女性たちのグループ分け

状況に応じた被服の変化の有無	グループ	外出時の被服の方法	人数
無	A	常にアバーヤとヒジャーブまたはチャーダルで身体全体を覆っている（常に⑶or⑷）	10
	B	常にヒジャーブまたはドゥパッターで頭や胸元を覆っている（常に⑵）	11
	C	常にドゥパッターで胸元だけを覆っている（常に⑴）	1
有	D	状況に応じてアバーヤやチャーダルを着たり脱いだりするが、常に何らかの方法で頭を覆っている（状況に応じて⑵or⑶or⑷）	15
	E	状況に応じて頭を覆ったり覆わなかったりする（状況に応じて⑴or⑵or⑶or⑷）	31
無回答			2
合計			70

出典：筆者作成
注１：アバーヤとは、首から下を全体的に覆う緩やかな外衣、ヒジャーブとは、ヘッド・スカーフ、チャーダルとは、厚手の大判ストール、ドゥパッターとは薄手のストールのことである。

資料１－13　「頭を覆わない」と回答した女性の場所ごとの人数

場所	大学内	研究科の中	ラーホールのショッピングモール	大学の外の道	ラーホールのローカルマーケット	出身地域のマーケット
頭を覆わないと回答した人数（複数選択可）	20	19	20	8	3	3

出典：筆者作成
注１：本表に含まれているのは、Eグループの女性たち31名である。

ミーズを着てドゥパッターで頭を覆ったときは、髪の毛がかなり見えていることが多く、風が吹いたら股などがもしかしたら見える可能性があって、もしくはズボンの足が見えているという状態です。あと腕についても風でめくれることもあります。それに対して⑶の女性は先ほどご説明しましたアバーヤを着ていて、髪の毛は完全にヘッド・スカーフで覆われており、風が吹いてもシャルワール・カミーズが見えることがないぐらいに覆われている状態です。

これを受けて、彼女たちの被服の方法をA、B、C、D、Eの五つのグループに分類しました（資料１－12）。

Aは、常にアバーヤとヒジャーブまたはチャーダルで体全体を覆っている。つまり資料１－11⑶と⑷の衣装を常に着ている状態です。そのような女性たちは全体のうち10名見受けられました。

Bグループは、常にヒジャーブまたはドゥパッターで頭や胸元を覆っている。常に資料１－11⑵の格好をしている女性たちです。彼女たちは11名見受けられました。

Cグループは１名ですが、常にドゥパッターで胸元だけを覆っている。つまり常に資料１－11⑴の被服の方法を行っている女性も１名は見受けられました。A、Bグループまでが、状況に応じた被服の変化がないグループです。

いまから説明するのが、状況に応じた被服の変化があるグループのDとEです。Dは、状況に応じてアバーヤやチャーダルを着たり脱いだりしていますが、常に何らかの方法で頭を覆っています。状況に応じて資料１－11⑵または⑶または⑷の被服の方法を行っている女性たちです。

Eグループは、状況に応じて頭を覆っているときもあるし、覆わないときもある。資料１－11⑴から⑷を自在に使い分けているかたちです。

ここから、全体の６割以上を占める46名の女性たちが、外出時に状況に応じて被服の程度を変えていることがわかりました。彼女たちはどのような場面でヴェールを纏って、どのような場面で脱ぐのでしょうか。D、Eグループの女性たちの事例を分析したいと思います。

資料１－13の表は、Eグループの女性31名を対象に、「場所ごとにどのような場面だったら頭を覆わないことがありますか」と尋ねた結果の表です。見ていただくとおわかりのように、大学内や研究科の中またはショッピングモールでは、ほとんど髪の毛を覆わないという人がかなり多い状態です。それに対して右の三つの状況、つまり大学の外の道やローカルマーケットや出身地域のマーケットでは、頭を覆う女性がかなり多く見受けられることがわかります。つまり場所によって被服の程度がかなり大きく変化していることが、ここから読み取れます。

では、なぜ状況に応じて、彼女たちはヴェールを脱いだり纏ったりするのでしょうか。これに対しては

二つの回答が見られました。一つ目は「男性からジロジロと性的に見られることが気持ち悪いから」という、①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りです。もう一つが、「男女関係なく人にジロジロと見られることが不快であるから」という、②性別を問わない他者の視線を意識した事例です。

①具体的な語りの紹介

ここでは四つの事例を紹介します。

「家の周りなどローカルな場所でチャーダルを纏うのは、いろんな種類の人（*har ṭaraḥ ke log*）がいるから。〔対して〕ここ（大学）には教育を受けた人がいる。人々のせいでやっている（被服の程度を変えている）部分もある。……自分の家族の車に乗っているときはローカルではないから、ドゥパッターで頭を覆う程度でいいけれど、バスなどのローカルな場所では、チャーダルで身体を覆わなくてはならない」（62番、Dグループ）

これは②性別を問わない他者の視線を意識した語りの事例であると分析しました。

「ローカル・エリアにいるような人々は無学である。人々は教育を受けていないから、私はチャーダルを使って身体を覆っている。大学内では、教育を受けた人ばかりがいるから、私はチャーダルで身体を覆わない。……ローカル・エリアでは、人々が女性の身体を見るし、ハラスメントのような奇妙な方法で女性をジロジロと見つめる。……ラーホールにはたくさんの人がいる。ラーホールは大きな都市だから、人々も教育を受けていて、女性にとってもとても快適な環境がある。……私の出身地では、人々は無学だから、環境も快適ではない」（15番、Dグループ）

これは①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りと、②性別を問わない他者の視線を意識した語りが重なり合った事例であると分析いたしました。

「自分の出身村[5]は後進的な地域だから、とても気を付けて（*eḥteyāt se*）過ごさなくてはならない。ラーホールと出身地の環境は大きく違う。ラーホールでは、自分の好きなように行動することができる。たとえばドゥパッターを首にかけて歩くこともできる。でも出身村ではそんなことはできない。あそこではアバーヤを着ないにしても、すくなくともドゥパッターで頭を覆わなくてはならない。あそこの人々はジロジロと見てくるし、すぐ噂話をする」（34番、Eグループ）

これは②性別を問わない他者の視線を意識した語りの事例であると分析しました。

「ローカルマーケットではとくにハラスメントなどの危険はないが、男性（若い男性も、歳をとった男性も両方）がジロジロと見てくる。マーケットの店員たちも見てくる」（19番、Eグループ）。

これは①見知らぬ男性の性的な視線を意識した語りの事例であると分析しました。

被服に関する女性たちの語りの分析

では、この①見知らぬ男性の性的な視線や②性別を問わない他者の視線は、どのように分析できるのでしょうか。

最初の「男性の性的な視線を意識している」ということは、田中雅一や嶺崎寛子が述べているような、「ムスリム社会における女性たちが周囲の男性による性的な視線を拒絶するためにヴェールを纏う」という指摘と重なっていると分析できます。

これに対して、性別を問わない他者の視線については、どのように分析できるのでしょうか。私は、これは社会規範を意識した行動だと読み替えることができるのではないかと考えました。すなわち、国全体の識字率が60パーセント未満、高等教育への進学率が10パーセント程度で、女子は9.3パーセント程度であるパキスタンにおいて、彼女たちはかなり少数派であると言えます。

さらに、しばしば１人で移動する機会を持つ彼女たちは、異質な存在として人々のまなざしの対象となりやすいと言えます。彼女たちは人々のまなざしへの対応として、その場において少しでも自らの異質さを軽減させるために、その場の服装様式に従ったかたちで自らの身体を覆っているのではないかと考えました。

ここまで、ヴェールを状況に応じてなぜ纏うのか、

5）ラーホールから車で一時間ほどの距離にある、シェークープーラーの農村のこと。

被服の程度を重くするのはなぜかについて述べましたが、ヴェールを脱ぐことについては触れていなかったので、最後に触れたいと思います。

ヴェールを脱ぐことについて、インドの都市中間層女性の身体技法のあり方を論じた常田夕美子は、「彼女たちが文脈に応じた個別具体的な他者のまなざしを内面化し、それと自らのまなざしを合わせたうえで、それに対する応答として適切な行為を選択している」と述べています。このような分析の視座を用いると、二つの以下の事例をうまく分析することができると考えました。

「〔同性の〕友人たちがショッピングモールではみんな頭を覆わないから、自分も覆わないようにしている。ショッピングモールで頭を覆っていたら周りから浮いてしまう」

「いままでは大学の中でもアバーヤを着ていたが、〔同性の〕友人にアバーヤを脱いで、と何度も言われたから、最近は脱いでいる」。

これらの事例は、同性の友人という個別具体的な他者によるまなざしを受け入れて内面化したうえで、自分の行為をそれに合わせた事例であると分析できます。ただし、彼女たちがヴェールを脱ぐときというのは、個別具体的な他者のまなざしに対応するという側面だけではなく、そこには「おしゃれでありたい」や「ファッションをしたい」という要素が強く存在していることも考えられます。

都市部の大学に進学するにあたって、服装に気を使っているという女性：「通っている大学では、シャルワール・カミーズを着ていると田舎出身であるとか、遅れているとか、そういった判断もなされてしまう。だから、シャルワール（ダボダボのズボン）ではなく、タイトなズボンやジーンズを履くようにしている」

彼女たちは、都市生活を送るなかで、大学内やショッピングモールなど、①見知らぬ男性の性的な視線や②性別を問わない他者の視線を受けにくいと彼女たちが感じている場所においては、自らの出身村では難しいようなファッションを楽しんでいるのではないでしょうか。実際に大学の中でアバーヤを脱いでいるという女性は、以下のように話していました。

「自宅からの通学時はアバーヤを着てヒジャーブを纏い、さらにナカーブをしており、家族には大学内での様子を伝えていない」

さらに、ショッピングモールで友人に合わせて頭の覆いを取っているという女性は、「友だちがそうするから否応なくヴェールを脱いでいる」と話してくれましたが、ショッピングモールでポーズを決めた自撮り写真をたくさん見せてくれて、おしゃれな様子を発信している側面が多く見られました。

女性たちは①見知らぬ男性の性的な視線と②性別を問わない他者の視線を意識しながら、それらが多いと彼女たちが感じる場所においてはヴェールを纏っているのに対し、それらが少ないと彼女たちが感じる場所においては、ヴェールを脱いでファッションを楽しんでいる側面があると言えるのではないでしょうか。このように、パルダという枠がありながらも、状況に応じて女性たちがファッションを楽しむ姿は、パルダの先行研究においては議論されてこなかった点であると言えます。

結論

問いへの応答

最初に、冒頭で出した問いへの応答をしたいと思います。最初の問いは、「現代パキスタンにおける都市高学歴女性にとって、パルダはどのような規範として存在しているのであろうか」という問いでした。これについては、「パルダは『どのような場面でどのように装い、振る舞うべきか』という自らの装いや振る舞いを規定する規範として存在している」と言うことができます。

もう一つの、「女性たちはなぜ状況に応じてヴェールを脱いだり纏ったりしているのか」という問いに対しては、「都市内部や、都市と出身村の間を移動しながら生活を送るなかで、多様な『場（大学、ショッピングモール、マーケット、実家への帰路、実家近くのマーケット）』における、①見知らぬ男性の性的な視線、②性別を問わない他者の視線を意識し、それに対応するためである」と言えます。

本研究の意義

現代パキスタンにおける都市高学歴女性たちにとってのパルダ概念とは、男女の不倫な関係を抑制し、男女関係のあり方を規定するイスラーム的な概念であることを、本研究において明らかにしました。イスラーム的な概念ですが、その実践的な側面については、かなりコンテクストに応じて変わる可変性を有していると言えます。

ムスリム女性の身体をめぐる問題は、アフリカのFGMやフランスのヴェール論争などで、しばしば政治的な文脈で論じられます。こうした現状において、ヴェールを纏う女性を「規範に縛られた存在」として、ヴェールを脱いだ女性を「規範から自由な存在」であるとする二項対立的な議論を乗り越える可能性を秘めているのではないかと考えました。すなわち、パルダという規範を持ちつつも、実践的な側面においてヴェールを脱いだり纏ったりしており、ここでは規範への従属と、そのヴェールの着脱とが結びつかないと言えるのではないかと考えました。

今後の展望

今後の展望について、最後に述べます。本研究においては、調査対象者の社会経済的背景をうまく結びつけて分析することができなかったので、博士課程に進むにあたっては、出身地や経済階層、家族構成などを考慮に入れたうえで、彼女たちが都市で生活しているときと、実家に帰って農村で知っている人がいるときとで、どのように生活が変わるのかという都市と農村との比較も考慮に入れていきたいと思っています。

これに関係して、さらに個別具体的な文脈背景に関しても分析に組み込んでいきたいと思っています。すなわち家族や親戚など知り合いの多い地域を歩くときや、実家の中で客人が来たとき、ラーホールにおいて買い物をするときなど、「いつ、誰と、どこにいるのか」がパルダ実践にかなり関わってくると思いますので、それも調べていきたいと考えています。そのうえで、今回の調査では聞き取り調査をメインにして、参与観察があまりできていなかったので、次の博士論文を書くにあたっての調査においては、参与観察にもう少ししっかり取り組みたいと考えています※。

※ 本発表は2019年2月に提出した博士予備論文に基づいたものである。

付録資料1　修士論文の章立て

序論

第一章 パルダとは何か
- 第一節 パルダの概観
  - 第一項 概念
  - 第二項 パキスタンのイスラーム法学者によるパルダ解釈
- 第二節 南アジア地域におけるパルダ研究
  - 第一項 先行研究の検討
  - 第二項 本研究の視座
- 第三節 ヴェール研究
  - 第一項 ヴェールをめぐる議論形成の背景
  - 第二項 先行研究の検討
  - 第三項 本研究の視座

第二章 パキスタンの概要
- 第一節 南アジアにおけるイスラーム
  - 第一項 南アジアにおける最初のイスラーム化
  - 第二項 ムガル帝国の誕生と衰退
  - 第三項 西洋諸国による植民地化とイスラーム復興
  - 第四項 国民会議派とムスリム連盟の誕生と結託
  - 第五項 ヒラーファト運動の進退と ヒンドゥー、ムスリムの対立
  - 第六項 パキスタン運動からパキスタン独立
- 第二節 パキスタン独立後のイスラーム化の進展
  - 第一項 中央政府による脱イスラーム化の流れ
  - 第二項 ズィアー政権におけるイスラーム化の推進
  - 第三項 ムシャッラフ大統領による対テロ戦争
  - 第四項 民政移管後現在のパキスタン

第三章 現代パキスタン都市部におけるパルダの概念
- 第一節 調査の概要
- 第二節 パルダに関する女性たちの語り
  - 第一項 パルダを実践している女性たち
  - 第二項 パルダを厳格には実践していない女性たち
  - 第三項 パルダを実践していない女性たち
- 第三節 事例の考察

第四章 現代パキスタン都市部における女性たちの被服の意義
- 第一節 被服の方法に従った女性たちのグループ分け
- 第二節 被服に関する女性たちの語り
  - 第一項 Aグループの女性たち（10名）
  - 第二項 Bグループの女性たち（11名）
  - 第三項 Cグループの女性（1名）
  - 第四項 Dグループの女性たち（15名）
  - 第五項 Eグループの女性たち（31名）
- 第三節 事例の考察

結論

付録資料２　調査対象者一覧（本調査）

	形式	年齢	大学	居住地	未／既婚	子供	兄弟	姉妹	父の職業	母の職業	出身地	学歴	家族形態	仕事
1	グ	18	PU	家	未婚	n	2	3	会計担当役員	主婦	Lahore	B.Com	J	n
2	グ	18	PU	家	未婚	n	0	2	?	?	Lahore	B.Com	J	n
3	グ	19	PU	家	未婚	n	1	0	公務員	主婦	Lahore	B.Com	N	n
4	グ	19	PU	家	未婚	n	4	0	店舗経営	主婦	Lahore	B.Com	N	n
5	グ	20	GC	家	未婚	n	2	0	会社	主婦	Lahore	Bsc Hons	N	n
6	グ	20	PU	Hostel	未婚	n	2	1	地主	主婦	Sahiwal	Msc	N	n
7	単	21	PU	Hostel	未婚	n	2	3	労働者	主婦	Qaboola Sharief	MA	J	n
8	グ	21	PU	Hostel	未婚	n	2	3	工場経営	主婦	Gujranwala	M.Sc	Both	n
9	グ	21	GC	Hostel	未婚	n	3	1	会社（ドバイ）	主婦	Fort Abbas	Bsc Hons	N	n
10	単	21	PU	Hostel	未婚	n	0	0	地主	主婦	Khanqah Dogran	MA	N	n
11	グ	21	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Chunian	MA	N	n
12	単	21	PU	Hostel	未婚	n	1	0	軍人	校長	Lodhran	?	J	n
13	グ	21	PU	家	未婚	n	3	3	事業家（退職）	主婦	Lahore	BS	J	n
14	グ	21	PU	家	未婚	n	2	0	公務員	主婦	Lahore	MS	N	n
15	グ	21	PU	家	未婚	n	2	1	地主	主婦	Hasson Abad	MS	J	n
16	グ	22	PU	Hostel	未婚	n	3	3	建設管理職	主婦	Okara	BS	J	n
17	グ	22	PU	家	未婚	n	1	1	公務員	主婦	Lahore	BS Hons	N	n
18	グ	22	PU	家	未婚	n	1	2	事業家	主婦	Lahore	MBE	J	n
19	グ	23	PU	Hostel	未婚	n	1	5	警察	主婦	Kasur	M.Phil	N	n
20	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	2	教師	主婦	Fort Abbas	MA	N	n
21	グ	23	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Chunian	MA	N	n
22	単	23	PU	Hostel	未婚	n	2	0	公務員	教師	Jahanian	M.Phil	N	○
23	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	1	州職員	主婦	Toba Tek Singh	M.Phil	N	n
24	単	23	PU	Hostel	未婚	n	1	2	死去	主婦	Sharaqpur	M.Phil	J	n
25	単	23	PU	Hostel	未婚	n	2	4	農家	主婦	Bahawalnagar	M.Phil	N	n
26	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	1	4	教師（退職）	教師（退職）	Okara	M.Phil	J	n
27	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	4	退役軍人	主婦	Okara	M.Phil	J	n
28	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	0	7	医師	主婦	Dera Ghazi Khan	M.Phil	N	n
29	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	6	事業家	主婦	Rahim Yar Khan	MS	J	n
30	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	2	4	銀行役員（退職）	教師（退職）	Gilgit	MA	J	n
31	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	0	0	死去	離婚	Layyah	M.Phil	N	n
32	グ	24	PU	Hostel	未婚	n	1	2	教師（退職）	教師	Gujrat	Ph.D	N	n
33	単	24	PU	Hostel	未婚	n	1	2	地主	校長	Bahawalnagar	M.Phil	J	n
34	単	24	PU	Hostel	未婚	n	1	0	地主	主婦	Sheikhupura村	MS	N	n
35	グ	24	PU	家	未婚	n	0	2	宗教政党役員	主婦	Lahore	MBE	N	n
36	単	24	PU	Hostel	未婚	n	2	1	退役軍人	主婦	Gujrat	M.Phil	J	n
37	グ	25	PU	Hostel	既婚	1	2	0	銀行役員、地主	教師	Jhang	M.Phil	J	n
38	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	3	店舗経営	教師	Rahim Yar Khan	M.Phil	J	n
39	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	2	会計担当役員	主婦	Layyah	MS	N	n
40	グ	25	PU	Hostel	未婚	n	2	4	卸売業	主婦	Sialkot	Ph.D	N	n
41	グ	25	PU	Hostel	未婚	n	4	6	法律事務所	主婦	Muzaffargarh	Ph.D	N	n
42	単	25	PU	Hostel	未婚	n	1	3	軍人（バハレーン）	主婦	Sialkot	MS	N	n
43	単	25	PU	Hostel	既婚	0	3	1	事業家,地主	校長	Multan	Ph.D	J	n
44	単	26	PU	Hostel	未婚	n	2	0	店舗経営	教師	Rahim Yar Khan	Ph.D	J	n
45	単	27	PU	Hostel	未婚	n	2	2	退役軍人	主婦	Islamabad	Ph.D	N	n
46	単	27	PU	Hostel	未婚	n	2	3	弁護士	主婦	Sialkot	Ph.D	N	n
47	グ	27	PU	Hostel	未婚	n	3	0	医師	主婦	Sheikhupura	Ph.D	N	n
48	単	27	PU	家	未婚	n	1	1	退役軍人	主婦	Bhimber	M.Phil	N	○
49	単	28	PU	Hostel	未婚	n	1	2	事業家（退職）	主婦	Gujranwala	Ph.D	J	n
50	グ	29	PU	Hostel	未婚	n	2	2	退役軍人	主婦	Bahawalpur	Ph.D	J	n
51	単	30	PU	Hostel	未婚	n	2	5	死去	主婦	?	Ph.D	?	?
52	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	2	2	農家	主婦	Chiniot	Ph.D	N	○
53	グ	30	PU	家	未婚	n	1	1	事業家	服飾店経営	Kasur	Ph.D	N	n
54	単	30	PU	Hostel	未婚	n	1	0	事業家（退職）	死去	Gujuranwala	Ph.D	J	n
55	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	2	1	事業家	主婦	Rawalakot	Ph.D	J	○
56	グ	30	PU	Hostel	未婚	n	3	3	退役軍人	死去	Gujrat	Ph.D	N	○
57	単	32	PU	Hostel	未婚	n	0	1	農家	主婦	Burewala	Ph.D	N	n
58	単	32	PU	Hostel	未婚	n	0	1	出稼ぎ（スペイン）	主婦	Mandi Bahauddin	Ph.D	N	n
59	単	35	PU	家	既婚	0	3	2	エンジニア	主婦	Swabi(KPK)	Ph.D	N	n
60	単	36	PU	Hostel	未婚	n	2	5	死去	死去	Multan	Ph.D	J	○

付録資料３　調査対象者一覧（予備調査）

	形式	年齢	大学	居住地	未／既婚	子供	兄弟	姉妹	出身地	現在の身分
61	グ	18	GC	家	未婚	n	1	3	Lahore	BA
62	グ	21	PU	hostel	未婚	n	2	1	Pakpathan	MA
63	グ	21	GC	家	未婚	n	3	1	Lahore	BA
64	グ	22	PU	hostel	未婚	n	1	5	Miyan Wali	MA
65	単	22	GC	hostel	未婚	n	1	3	Sheikhupura	BS
66	グ	22	GC	家	未婚	n	1	2	Lahore	BA
67	グ	22	GC	hostel	未婚	n	4	2	Lahore	MA
68	グ	24	PU	家	未婚	n	0	4	Lahore	Internship
69	グ	24	PU	家	未婚	n	2	3	Lahore	Internship
70	単	31	PU	hostel	未婚	n	1	2	Okara	Ph.D

■参考文献

〈日本語・英語文献〉

麻田美晴・中谷純江. 2012.「パルダ」辛島昇・前田専学他編『［新版］南アジアを知る事典』平凡社, 628.

井筒俊彦訳. 1958.『コーラン 中』岩波書店.

Feldman, Shelley and McCarthy, Florence, E. 1983. Purdah and Changing Patterns of Social Control among Rural Women in Bangladesh, *Journal of Marriage and Family* 45 (4): 949–959.

後藤絵美. 2014.『神のためにまとうヴェール：現代エジプトの女性とイスラーム』中央公論新社.

Haque, Riffat. 2003. *Purdah of Heart and the Eyes: An Examination of Purdah as an Institution in Pakistan*, Thesis (PhD). University of New South Wales.

――――― 2010. Gender and Nexus of Purdah Culture in Public Policy. *South Asian Studies* 25 (2): 303–310.

池田恵子. 1993.「バングラデシュの米収穫後処理業における女性労働：パルダ規範の変容をめぐって」『女性文化研究センター年報』7: 63–79.

Khurshid, Ayesha. & Shah, Payal. 2017. Claiming Modernity through Clothing: Gender and Education in Pakistani Muslim and Indian Hindu Communities. *Gender and Education*: 1-16. DOI: 10.1080/09540253.2017.1302077 (Published Online).

Mahmood, S. 2005. *Politics of Piety: the Islamic Revival and the Feminist Subject*. New Jersey: Princeton University Press.

中谷純江. 1995.「インド・ラ-ジャスターン州のラージプート女性の宗教的慣行：ヒンドゥー女性にとっての自己犠牲の意味」『民族学研究』60 (1): 53–77.

野中葉. 2015.『インドネシアのムスリムファッション：なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版株式会社.

Papanek, Hanna. 1973. Purdah: Separate Worlds and Symbolic Shelter, *Comparative Studies in Society and History* 15 (3): 289–325.

Pastner, McC, Carroll. 1974. Accommodations to Purdah: The Female Perspective. *Journal of Marriage and the Family* 36 (2): 408–414.

須永恵美子. 2014.『現代パキスタンの形成と変容』ナカニシヤ出版.

田中雅一・嶺崎寛子. 2017.「序：『特集』ムスリム社会における名誉に基づく暴力」『文化人類学』82 (3): 311–327.

常田夕美子. 2011.『ポストコロニアルを生きる：現代インド女性の行為主体性』世界思想社.

White, H., Elizabeth. 1977. Purdah, Frontiers: *A Journal of Women Studies* 2 (1): 31–42.

〈ウルドゥー語文献〉

Maudūdī, Saiyid, Abū, al-A‘lā. 1940. Parda (28th edition). Lahore: Islamic Publications Limited.

〈ウェブサイト〉

Province Wise Provisional Results of Census 2017：

http://www.pbs.gov.pk/sites/default/files/PAKISTAN%20TEHSIL%20WISE%20FOR%20WEB%20CENSUS_2017.pdf（2018年12月19日最終閲覧）

■質疑応答

和崎聖日（司会）　イスラーム学的な知見があり、そして場、状況の定義に依存した服装の変化というミクロな生活について、参与観察も十分にあるような、フィールド資料に基づく充実したご報告をありがとうございました。ここでは主に事実関係について、質問がある方はお願いします。

帯谷知可　資料１－９のショッピングモールの写真で、ショウウインドウに洋服が展示されていますね。これはパキスタンではどのような人たちが着るのでしょうか。女子学生たちも着ることがあるのか教えてください。

賀川恵理香　これに関しては私もすごくびっくりしてシャッターを切ってしまったという感じですが、私の見た限りでは、こうした服装をしている人はいませんでした。私が調査したのは公立大学ですが、私立大学で学費も何十倍もするような大学では、ここまではいきませんが、タンクトップなどのような服を着ている女性も見られました。でも、こうした洋服については、「これは誰が買うのかな」と一緒にいた友だちに言うと、「誰も買わないよ」と言っていました。

酒井啓子　事実関係について質問です。おもしろいなと思ったのは、湾岸アラブだとチャーダルとアバーヤとは同じで、頭から被ります。まさにガウンなんですね。ここでは違っていて、しかもチャーダルやアバーヤは場所によって脱いだり着たりするという回答がありましたが、アバーヤが首から下ということになると、脱ぎ着のしやすさがチャーダルとアバーヤとでかなり違うと思います。湾岸で言っているアバーヤやチャーダルは、よほど厳しいというか、きちんとしなければいけないときに口まで隠せるものです。頭から被るので口まで隠せる外向けのものなので、脱ぎ着しやすいと思います。ご質問では、アバーヤとチャーダルを一緒にして脱ぎ着をするかと聞いているようですが、脱ぎ着のしやすさ、しにくさが同じものなのか、違うものを一緒の質問で聞いてしまっているのか、どちらでしょう。

賀川　ありがとうございます。資料15のＤグループについての話だと思います。実はこの質問の仕方はいま申し上げたとおりではなくて、「この場面ではどのような服装をしますか」という聞き方をしていました。ですから、「このような場面でアバーヤを脱ぎますか」、「チャーダルを脱ぎますか」というよりは、たとえば「大学の中では何を着るか」、「大学の外では何を着るか」というかたちで記入してもらったものをまとめたものです。

たしかに公衆の面前でアバーヤを脱ぐことはできません。ですから大学の中で脱ぐときは、女性用のコモンルームみたいな部屋があって、そこで脱ぎます。脱いだ後のシャルワール・カミーズなどは皺になっているので、それをきちんと整えたりもします。それに対してチャーダルはパッと脱げるので、たしかにチャーダルのほうがかなり脱ぎやすい状況にあるかと思います。

酒井　チャーダルの下がどのような格好なのかも関係しますよね。これは基本的に脱いだら全部がシャルワール・カミーズになるんですか。

賀川　そうですね、基本的には。

酒井　ジーンズにＴシャツという人はいませんか。

賀川　Ｔシャツはあまり……。ジーンズはたしかに履くこともあります。下のズボンはタイトなものを履いたり、タイツのような、日本で言う10分丈のスパッツを履いていたりもします。Ｔシャツは、寮の中では着ている女性はいますが、すくなくとも私が調査した大学の中では見たことがないですね。

和崎　パルダについての言説の内面化の部分と、資料15で５グループの分類とで、どの語りをしている人がどのグループに属するか、対応関係はまとめていないのでしょうか。

賀川　すみません、それはありません。

和崎　なくてもいいと思いますが、たとえば「パルダは盾であり、羞恥心で……」と言っているのに、実践面では脱ぐ人だったらおもしろい。そういう自分が語っていることと行動とのずれみたいなものも資料で提示できていたら、より興味深い表現になると思います。

賀川　ありがとうございます。先ほど、①パルダを実践している人と、②部分的にしか実践していない人と、③実践していないと三つがあると申し上げましたが、実際に彼女たちの被服の方法を比べてみると一緒だったりします。一緒のような被服の方法だけれども、ある人の基準では「実践している」と言っているし、ある人の基準では「実践していない」と言っているという違いがある部分もおもしろいかと思います。

後藤絵美　細かいところですが、マウドゥーディーによるという法学者のコーランの解釈の部分につい

て質問です。もともとアラビア語のコーランの記述をパキスタンの文脈に落として訳したものを、さらに日本語に訳していて、私は日頃解釈や翻訳について研究しているので、おもしろいなと思って読みました。

そのなかで、24章、光り章の30節、31節のところに「まだ女性のパルダに関する知識を持たない男児以外に」とありますが、ここはアラビア語だと「アウラ」で「恥部」なんですね。「恥ずかしい部分に関する知識を持たない男児」という文脈ですが、これにパルダが入るのはおかしくないかなと思いました。これはもともとこういうものだったのかというのが一つ目の質問です。

もう一つ、33章59節に「自分の上にチャーダルの面被をかぶるようにしなさい」とあります。これはおそらく今回の報告に関わってくると思いますが、これはウルドゥー語でこのような意味で出てくるということなんですよね。

賀川　ありがとうございます。まさにここに関してのコメントをいただきたくて今回持ってきたところが大きいのです。パルダに関する知識の部分は、ウルドゥー語のマウドゥーディーが訳した原文では「パルダ」となっていて、そのまま訳してしまいました。ウルドゥー語では「サタル」というと恥部を意味することが多くて、そういう意味なのかなと考えたのですが、原文では「パルダ」で記されていました。

59節について、「チャーダルの面被をかぶるように」という部分ですが、マウドゥーディーがここを訳すときに「顔の覆いについて述べている」と主張していて、ここは身体全体のことも言っているかもしれませんが、とりあえずニカブは絶対にしなければいけないということを述べていたので、その部分に該当するのではないかと考えます。